

人口減少・超高齢社会を乗り越える
 特集 広域コミュニティ
 連載第2回

地域づくり座談会



地域づくり座談会（松陽小学校区）
 （6月3日（日）立崎公民館）

平成30年7月号掲載の特集「広域コミュニティ」連載第1回では、人口減少・超高齢社会を乗り越えるために「広域コミュニティ」という考え方があることを紹介しました。今回の特集では、市が「広域コミュニティ」づくりを推進していくに当たり、地域住民の「広域コミュニティ」への理解と気運の醸成を目的として取り組んでいる「地域づくり座談会」を紹介いたします。

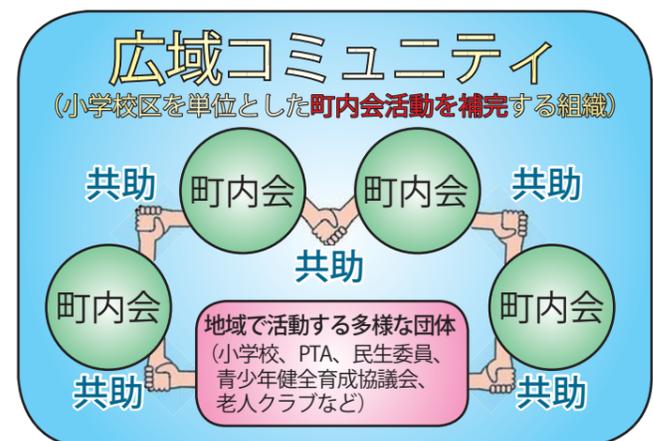
カギは「共助」



これまでの、地縁組織としての町内会が、町内会の住民が共に助け合うこと（共助）で、それぞれの地域の意思決定やイベント開催などにおいて、地域の暮らしを支える重要な役割を行ってきました。

しかしながら、人口減少、高齢者や一人暮らしの世帯の増加が見込まれている中で、町内会活動の担い手の減少や町内会の役割の多様化などにより、一つの町内会だけでは、これまでどおりの活動ができなくなってきた状況が見受けられます。そのような状況は、今後ますます加速していくことが予測されます。

このため、市では将来を見据え、学校を通してつながりのある小学校区を主な単位とした「広域コミュニティ」や近隣の町内会と一緒に活動する「広域コミュニティ」の設立を提案しています。小学校区の複数の町内会などが、



一緒に活動することで、一つの町内会だけでは活動が困難な状況を打開しようとする「広域コミュニティ」は、町内会活動を補完する組織として、地域の課題に対し、共に助け合いながら地域の暮らしを支えていく共助の組織になります。

概ね小学校区を単位とした
 地域住民が集まり座談会

町内会だけでは解決できない課題を解決するためには、まず、地域に暮らす人が、町内会や地域の課題をしっかりと把握する必要があります。そこで、町内会や地域として、何ができて、何ができていないのかの情報共有を通して、地域住民自身が「広域コミュニティ」の必要性を理解するための手助けの一つとして、市では、地域づくり座談会を開催しています。

地域づくり座談会とは

地域づくり座談会では、高崎経済大学地域政策学部の櫻井常矢教授が進行役を務めます。参加者は5〜7人のグループに分けられ、そのグループそれぞれに、市が開催する「地域づくり人材育成講座」で会議などの進行役としての理論や技術を学んだ講座修了者（以下「コーディネーター」）が配置されます。また、地域で活動する多様な団体にも話し合いの場への参加を呼び掛け、地域に関わるより多くの人が、連携・協力できる環境を構築できるように配慮しています。

地域づくり座談会は、あえて「決めない話し合い」です。

進行役の櫻井教授の講話後、コーディネーターの調整のもと、参加者同士で地域の良いところ、地域にある魅力（人・団体・工夫）、地域を見渡して気になることや改善したいこと、それらへのアプローチは町内会単位で取り組むのが良いか「広域コミュニティ」単位で取り組むのが良いかなどの意見を可能な限り出します。その中で、町内会だけでは解決できないが、「広域コミュニティ」ならば解決できるといった事例の「気付き」を得るきっかけとなることもつながります。

地域の暮らしを支える

地域づくり座談会を通して、町内会相互の連携などにより、町内会活動を合理化したり、課題解決の方法を共有したりすることができ、「広域コミュニティ」の必要性を地域住民自らが明らかにしていくことができるようになります。

「広域コミュニティ」という組織の設立が目的ではありません。これからの「地域の暮らしを支える」ための手段の一つが「広域コミュニティ」という考え方なのです。

「広域コミュニティ」の取り組みは、地域の生活に密着した活動が多いので、目立ったことも少なく、注目されにくい部分があります。しかし、地味ではありますがこれからの地域にとっては重要な活動であり、これからの本市にとっては必要不可欠なものです。

Camera Report

地域づくり座談会 は、このような形で開催されています。



まずは、櫻井教授の講話を聞きます。全国の地域づくりの事例などを学びます。



書記は、コーディネーターが一手に引き受けるので、参加者は発言に集中できます。



コーディネーターが、話し合いの場を和ませるので、発言しやすい雰囲気が作られていきます。



住民の意見が一枚にまとめられ、参加者が普段感じていることを共有することができました。

連載第3回（最終回）は…

次回の特集では、「広域コミュニティ」として組織化し、実際に活動をしている東地区コミュニティ推進協議会などを紹介します。